
異世界 L i f e

孫左衛門

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界Life

【Nコード】

N77400

【作者名】

孫左衛門

【あらすじ】

気が付いたらそこは一面の荒野だった・・・
しかしなんだかんだいってのらりくらりといきていくタキシュー
イチの異世界放浪ストーリー。

1話 プロローグ（前書き）

いろいろと手を伸ばしてはいますが今回はストックが10話ほどあるのでなんとかやっていけるのだと思っています。どうぞよろしくお願いします。

1話 プロローグ

——世の中には幸も不幸もない。ただ、考え方で
どうにもなるのだ——

by シェークスピア

「なるほどな、やっぱり偉人は言う事がちがうなあ。つまり要は、
考え方によって幸は不幸にも不幸は幸にもなるってことか・・・深い。」

ちょっと悟りを開いたような気持ちになってしみじみと頷く。右手に持つてゐる本は昨日友達に貸してもらった『世界の名言・格言集』だ。

・

・

・

・

・

「って、そんなあわけえエエあるかああああアアア!!!」

「！！！！」

つい衝動にまかせて本を投げてしまった。

しかし、おかしい。なぜ俺こと滝宗一はこんな状況に・・・確か学校から家に帰って、家族がいなかったばかりで玄関に力ギがかかってやむなく自分の部屋の窓から侵入するはめになり、そしたらなんかピカーツとなって眼を開けたらここに・・・そしてもうここに着いてから半日経つ・・・と。

周りを見渡すと360度に渡ってぐるっと一面の荒野が広がっている。どの方向に目を凝らして見ても地の果てまで荒野が広がっている。あるのは僅かばかりの草や木とごつごつした岩のみだ。

「ライライ、シェークスピアさん。俺にはどうしてもこの状況が不幸にしか思えんのだが・・・ん？そういうえ俺ってけっこう周りに変人と呼ばれてたな・・・はっ、そういうことか！俺が変人で世間一般の人と感性が違うからこの状況が不幸に思ってしまったんだな。そうか、ごめん！シェークスピアさん。俺ちよつと傲慢になつてた。」

目の前に浮かぶ俺が勝手に思い描いた（顔を知らない）シェークスピアさんに話しかける。

とりあえず状況を整理しよう。周りは荒野今のままだと近くに町があるのかはわからんがたぶん辿り着く前に力尽きるだろう。となると、人が通る可能性も皆無・・・と。持ち物もさっき投げた本のみで、何もなし・・・あれっ！？

「俺、やっぱさいっこーに不幸じゃん！というかしかしたらというかしなくとも死ぬくね？」

そんな呟きに反応したかのように冷たい風が通り抜けてゆく。すると段々言葉に現実味が増してくる。

身体が冷えていくのが分かる。

「マジかよ。まさかこんな訳の分らん状況で死ぬのか、俺は・・・いや、まだ分からん。諦めるな！！とりあえず、歩き続けてみよう。」

そう自分に叱咤して歩き出す。しかし、歩き続けても風景は全く変わらない。もう何時間歩いただろうか、日はとつくに沈み辺りはもう完全に黒く染まっていて、空には星がそこら中いっぱい広がっている。そんな自分のいた街の空と変わらない景色に若干の安堵をおぼえる。

「とりあえず、今日はここまでにしよう。」

そう一人呟き、近くの岩にもたれかかる。砂漠のように夜が一気に寒くなることを予想していたが、そんなことはなく昼と夜の寒暖差はそんなにないようだ。凍死の可能性もありえたので、寝ることができるか心配だったがこれだったら寝ても凍死の心配はないだろう。

「明日は何か見えるといいなあ。」

そう思い、投げた後すぐ拾ってあった唯一の持ち物である本を抱きながら眠りについた。

あれからもう3日が経った。あれから同じ方向に向けてずっと歩き続けているが景色は変わらなかった。そして、明るる日やっと視界に街らしきものが見えてきた。

「あつた。やつぱりあつた。諦めないでよかった・・」

この5日間ずっと飲まず食わずただ一心不乱に歩いてきた。盲目的にこの方向、今進んでいる道が絶対に街に続いているはずだと信じて。この方向に本当に街はあるのかなど一度考えてしまえがどんどん考えが悪い方へと進んでいき心が折れてしまいそうだった。

本当に嬉しくてついつい小走りになってしまふ。5日間も飲まず食わずだったのにどこにこんな力があつたのかと自分でも不思議に思う。

「後・・少しだ。やっと飯にありつけ!？」

急に背後に寒気がした。

そして振り向き、事態を確認した宗一は一人溜息をついた。

「“人生とは不幸の連続である”とはよく言ったもんだな。正に今この状況がそれに当てはまる。」

振り返った先には動物園で見た虎をそのまま3倍にした感じの大きさの生き物が3匹こちらを舌舐めずりしながら見ていた。牙が異様に長いな、サーベルタイガーってやつかな。

「あーあ、この感じだはあれだな。完全に俺を狙ってるよな。実は草食動物です!とかいうオチがあつたりするんじゃないか思ったりしたけど、あーもう涎までたらしちゃって・・はしたないぞ!」

なんとなくノリでビシツと人差し指を虎らしき生物につきつけてみる。

というか俺意外と冷静だな。普通だったらパニックになるとか、恐怖でガタガタとかするんだろうけど。もしかしてあれか、恐怖が一周しちゃって的なパターンなのか。

「そう言えば、昔テレビで見たことあるけど、ライオンとかがてゆつくりと獲物を追い詰めていくはずだよな。虎はどうかしらんけどだぶん似たようなもんだろ。そうになると、獲物の前に姿を現したってことはもう既に積んだってことだよな・・・」

「グルルツ！」

その言葉を肯定するかのように低いうなり声が返ってきた。

「俺、おいしくないよーとか言っても絶対無理だろうな。」

「グルルツ！！」

またしても肯定するかのようになり声をあげる。

「お前絶対言葉理解してるよな。まあそれはおいといて先にいっとくと、俺はお前にただで喰われるつもりはない。どうせ死ぬだろうけど、何もしないで死ぬのはしたくない。例えそれでもつと苦しむハメになってもな・・・ま、動物のお前に言ってもわからんだろうけどな。」

言い終わると同時に片足を前に出し、半身の体勢になり構える。サーベルタイガーはそんな俺の戦闘の意思を感じ取ったのか体勢をより低くし、今にも飛びかかれるようにしている。

「ほらっ、かかってこいよ。」

その言葉を合図にサーベルタイガーが襲いかかってくる。

同時に宗一も前に踏み出す。普通ならここで回避をとるのだろうが、そんなことはしない。身体の調子もいつも通りではないし、おそらく回避しても3匹もいたら簡単に追い打ちをかけられ一撃を受けるのがオチだろう。それならば、あえて突っ込み一か八か懷に入り込んでみる。

えてしてその行動は成功した。目の目には無防備な腹が広がっている。どれだけ効くのか分からないがとりあえず、全身全霊の力を込めて拳を突き出す。

・・・

・・・

「・・・・・・は？」

拳はサーベルタイガーを撃ちとばすことはなく、そのまま肉をつきやぶり骨を砕きただ串刺しにしていた。串刺しにされたサーベルタイガーは暴れることなくだらんと四肢を力なく垂らしている。

サーベルタイガーを串刺しにしている本人と同じように他の2匹も啞然とその光景を見ている。

「もしかして、今の所が弱点で凄く脆いのかな。」

他の2匹よりもいち早く我に返ったが、今の事態を自分の力でおこしたことが信じられなくてサーベルタイガーという生物のせいにすることにした。

さて、2匹はというと目の前で串刺しにした人物を見て警戒の色を先ほどよりも強めている。

先ほどまでのように簡単に飛び込んでくるようなマネはせず、じりじりと前方と後方から距離を詰めてくる。

（くそっ！厄介だな。）

ある程度近づいてきたところで2匹は足を止めた。どうやら焦らしてこちらの集中力が切れるのを狙ってるようだ。やはり相当知能が高いらしい。一度攻撃を見せたせいで2匹はこちらの反撃を警戒しているはず。そうなるとやはり攻撃のタイミングはサーベルタイガーが攻撃した瞬間しかない。

（覚悟を決めるか。）

そう心に決め、隙を作るために一度力を抜く。
その瞬間前後から、同時にサーベルタイガーが飛びかってくる。

「グアアアア！！！」

「まず、一匹！」

同時先ほどと同じように前方のサーベルタイガーの懷に飛び込む。頬をわずかに牙がかすめたが気にせずそのまま拳を突き出し、串刺しにする。とりあえずは一安心だがまだ終わっていない。すぐ後ろにはもう一匹が既にこちらに牙を突き立てようとしている。すぐに、拳を引き抜き迎撃に移ろうとしたところで問題が起こった。

（抜けねええええ。）

そう、拳が骨に引っかかったのか一度で抜けなかった。しかし、もう拳を抜いているような余裕はない。

「つつ！くつそ！！間に合ええええええええええ！！」

瞬間足を跳ね上げ、サーベルタイガーに向かって突き出す。その

まま足先がサーベルタイガーの牙に届き、砕いた。更に足先は口から脳髓を貫き、口から頭に掛けて串刺しにした。

なんとか3匹を撃退することに成功した、が・

「つつてえええ！」

激痛が走ったところを見れば、二の腕を牙が貫いていた。少しずつ生温かい血が腕をつたって落ちていく。確かに蹴りはサーベルタイガーに届いていたが牙の方がわずかに早く宗一の身体に届いていた。

おそらく動脈が傷ついているはずだ。だから、今牙を抜くと血が急速に失われる可能性がある。それを考えるとこのままにしておくのが一番だろう。とにかく早く街について治療してもらわなければどっちにしろ血が足りなくなる。最悪、腕はもうあきらめた方がいいかもしれない。とりあえず、早く街へ。

「ああ、やばい・・・」

目の前の風景がかすんで見える。

「血イ・・・流しすぎたか・・・」

少し歩いただけでこれだ。もう後少し歩けば意識はなくなるかもしれない。

目の前には先ほどから見え始めた街並みが見える。どうみても、自分がいた場所の面影はない。

「ははっ・・・」

思わず苦笑がこぼれてしまう。

まさかこんな訳も分らないところで誰にも知られず一生を終えるハメになるとは思いもしなかった。こうなるならちゃんと親に親孝行をしとくべきだったとか、後悔することをあげていったらキリがない。

「あと、少しだったのに。」

これだけ一生懸命になったのはいつ以来だろう。

数日前までの俺は本当に半端だった気がする。それけに街に辿り着くという大した目標ではないけれど、それを達成できないことがこんなにも悔しいことだとは思わなかった。

そう考えている間にも意識がどんどん沈んでいく。

「み・・んな、ごめん・・・」

そこで完全に意識が途絶えた。

1話 プロローグ（後書き）

ありがとうございました。またお願いします。

2話 異世界人であること

「・・・・・・・・どこ？」

周りを見渡すがこのような景色に見覚えはない。周りを見ても何もなく、かすかにだが薬局特有の薬の匂いが漂っている。少しだけ倒れる前の光景が夢なんじゃないだろうかとも思ったが、やっぱり違うらしい。その証拠に身体を見るといたるところにガーゼのような白い布が当てられているし、右腕の包帯が巻かれている部分などにいたってはまだズキズキと痛んでいる。

というかどうして生きてたんだろうか。あの状況だったら死んでもおかしくなかったはず、というか普通死んでるはずなんだが・・・結果的に運が良かったってことか。まあ運が良かったらこんな状態になってないだろうが。

思考の海へと沈んでいると何者かが突然ドアを開けた。

「っ！誰だ！」

こちらに来てからいろいろあったせいでつい過剰に反応してしまった。ドアの方を見ると女性が俺の声に驚いたように目を丸くしてこちらを見ている。しかし少しするとこちらを安心させるかのように微笑みかけながらこちらへと歩みよりベッドの横の椅子に腰かけた。

「大丈夫、安心して、敵じゃないわ。私はクレイ・アルスターよ。この街で医者をやってる。クレイって呼んでね。それにしても良かった！だいぶヒドい状態だったから目を覚ますかどうか不安だったんだけど、これならもう安心ね。」

そしてまた優しくこちらに微笑む。それにしてもこのクレイさん、本当に美人だ。今まで前の世界で美人という人種にあつてきたがこの人はなんだかその人たちとは違う。何ていうんだろ、どこか神秘的な美しさを秘めている。ただ笑っているだけなのにこちらを自然と落ち着かせてくれる。

おかしいな、普通は綺麗な人に話しかけられると慌ててしまうのに・・・

「先ほどはすみません。色々あつたせいでどうも過剰に反応してしまつて。俺の名前は滝宗一です。ここにあわせて言うならシューイチ・タキですかね。それでどうして俺はここに？確か荒野で倒れたはずなんですが。」

「気にしないでいいわよ。それでここにいるのはここが治療院で私が医者だからよ。」

ふふん、と鼻をならして誇らしげに胸をそらす。

「いや、あのそういうことを聞きたいわけじゃなくてですね。倒れてからここまでに至る経緯を聞きたいんですが。」

「ああ、ごめんね。分かつてるわ、ちよつとノリで言ってみただけ。それでどうしてここに運ばれてきたかだったわね。それは冒険者がここまで連れてきてくれたからよ。なんでも依頼を受けに行く最中だったらしくて、それで街をですぐしたら血まみれで倒れているあなたを見つけたらしいわ。それで急いでここに運んできたってわけ。」

少し悪びれながら事の詳細を話してくれたクレイさんは突然身体のあちこちを触りだし、「大丈夫そうね。」とか言いながら痛む傷

を軽く叩き、また椅子に腰かけた。

「それにしても運び込まれたのがここで本当に良かった。他だったらどっちにしろ死んでたと思うわ。私がこの国でも屈指の優秀な治療師でよかったわね。」

誇らしげに胸を張るクレイさんだが、この人は気付いているだろうか、そのたわわに実った2つの物体が揺れて凶器と化していることに。その胸をあまり直視しないように（ちゃっかりちらちら見ている）しながらさっきのクレイさんの言葉を思い出す。

治療師ねえ……治療……ジュツシ？

「あの、すみません。治療師ってなんですか？」

「え、知らないの？もしかして記憶喪失とか？」

突然心配そうにこちらに顔を近づけ目を覗きこんでくる。

「すみません、ちょっと近いです。それに記憶喪失じゃありません。あ、それと国の名前も教えてもらってもいいですか？」

「え、国の名前も？」

本当に大丈夫かといった感じでこちらを心配げに見るクレイさんに「俺はちゃんと正常ですよ。」と返し、答えを促す。

「国の名前はフェアリアスよ。そしてこの街がダラス。治療師っていうのは、回復魔法を使って病人や怪我人を治療する人のことを言うわ。他にも回復魔術師とか魔法医師とか呼ばれたりもすることもある。それで、記憶喪失じゃないっていうのなら納得できる説明を

早くお願いできる？」

国の名前はフェリアスか。確か俺の世界にそんな名前の国はなかったはず。世界にあまり知られていない国がもしあったとしてもこれだけの文化レベル（倒れる前に見えた街並みから18世紀ぐらいのヨーロッパ並みと判断）があれば普通に世界に認知されているはず。ツバルのような本当に小さな島国でさえ世界に認知されているのだから。

ということは異世界っていうのが妥当だな。俺らの世界では物語の中でしか出てこなかった回復魔法とかいうファンタジー用語が出てきたしな。

「いいですが、今から話すことは他言無用でお願いします。もし守れないっていうのならお話することはできません。」

「そこら辺は大丈夫よ。医者には守秘義務っていうのがあからね。」

こういうところは元の世界とかわらないんだなと少し感慨にふける。

「じゃあ、話しますね。信じられないかもしれませんが俺は異世界人です。つい数日前までは前の世界で普通に日常生活を送っていたんですが気付いたらこの世界に立っていました。なので、この世界のことは全くといっていいほど知りません。」

正直異世界人だということを話すことはあまり知られたくなかったが、もしかすると以前にこの世界にきた異世界人の情報を得ることが出来るかもしれないし、クレイさんも他言しないと云ってくれたので正直に話すことにした。

さあ、バカにするんならしてくれ。

「そう、シューイチくんは異世界人だったのね。それなら確かに何も知らなくても納得がいくわ。」

「えーっと、驚かないんですか？」

「すっごく驚いてるわよ。ただあまり表情にでてないだけ。」

なんだか拍子抜けだ。もっと「ウソだー」とか冷めた目で見られると思っていたが、意外と反応が普通だった。もしかして、この世界って度々異世界人が訪れているのか。いや、やっぱりそれはないか。それだったらそんなに驚かないはずだ。となると・・・

「もしかして以前にも異世界人がこの世界に来たことがあるんですか？」

「ええ、あるわよ。ま、とはいっても200年前の話だけだね。」

「本当にあつた？！それにしても200年前かあ。クレイさんはどうしてそのことを知っているんです？」

「それは歴史に出てくるからよ。200年前の異世界人もその前もそのさらに前も現存する歴史の中には多くの異世界人が登場しているわ。それも歴史の重要な場面ばかりね。もしかすると他にも有名になっていないだけで異世界人はもつとこちらの世界に来ている可能性っていうのもあるんだろうけど、そんな話は聞いたことがないから、こちらに来た異世界人は歴史に出てくる人物で全員でしよ
うね。」

なるほど、もう既に幾らかの人が俺と同じようにこの国に訪れているのか。

ただ、問題はこちらに來た異世界人の全員が歴史の重要な場面に登場しているということだ。となると、俺も今代のこの世界の重要な場面に関与する可能性が高いということか。

「そういうわけで分かったと思うけど、異世界人がこの世界に与える影響はかなり強い。だから、できるだけ他の人には異世界人だということと話さないほうがいいわね。もし、話してこれが王宮の上の方にも伝わったりすれば何かしらのゴタゴタに巻き込まれる可能性が高いわ。ま、さっきの用心の仕方だったらその心配も杞憂に終わりそうだけどね。」

「そうですか。1つ質問なんですけど、その以前來た異世界人がその後どうなったか知ってます？元の世界に帰ったとか、そのままこちらの世界で一生を終えたとか。」

そう、ここが一番の問題だ。正直もうこちらの世界には來てしまったのだから今更ジタバタしても仕方がない。だが、本音を言うとはやはり元の世界に帰りたい。親には何も言わずにこちらの世界に來ることになってしまったし、友達とかも一緒だ。せめてこちらに來る前に一言いっておきたかったな。

「うーん。そこまでは流石に詳しくはないからはつきりと断言はできないんだけど、おそらくこの世界で一生を終えたと思うわ。どこかに墓があるっていうのも聞いたことがあるし。もし、詳しく調べたいんだったら図書館に行って調べることをお勧めするわ。」

そう言って、椅子から立ち上がり扉に歩いていくクレイさん、

「あ、忘れてました。俺を助けてくれた人の名前を覚えてもらえますか？」

「ああ伝えてなかったわね。助けてくれたのはシルバっていう奴よ。たぶん後2、3時間もしたら来ると思うからそのときにでもお礼を言え方がいいと思うわ。それじゃあ、後で食事を持ってくるからしっかり横になっておくのよ。」

そう言つとクレイさんは部屋を出て行つた。

「ふう、まさか本当に異世界だったなんてな。頭では理解していたとはいえはつきりと誰かにそれを言われるとやっぱり本当に実感するな。それもお約束の展開で元の世界に帰れないかもしれないときだ。」

まだ帰る方法がないと決まったわけではないが、その可能性はほとんど無いに等しい。今はまだその可能性にすがって生きていけるが、本当にもし元の世界に帰れないと分かってしまったら・・・そこまで考えて身体が急に冷えるを感じた。

「・・・それまでに覚悟をしておかないといけないな。」

1人寂しい部屋で小さく溜息をついた。

部屋をでて、私はやっと小さく息を吐いた。

「やっぱり異世界人だったか。」

小さく吐いた言葉に少しだけ哀しみの色が混じる。

彼が異世界人だということは正直予想できたことであつた。さつきは『普通の医者だつたら』的なことを言つたが、本当なら私でも十分手遅れなレベルの傷であつた。だが、私の治癒魔法に過剰なまでに適応した結果、結局すぐ完治してしまつた。これは普通ではない。普通この世界の生き物は何もしなくても生きてる上で誰しも微弱にだが魔法をレジストする力を発している。そのため、魔法を発するためには練習がいるし、ささいな魔法だつたら痛くもなんともない。だから治癒魔法も本来なら100パーセントもしくはそれ以上の効果を得られることはないのだが、実際に彼はその効果を得られた。そうなる異世界人の可能性も・・・ということだつたんだが。

「はあ・・・。」

先ほど彼に言つた通り異世界人はこちらで良くも悪くも歴史に残るような出来事の渦中に登場している。彼がこのタイミングでこの世界に来たのも偶然ではないのだろう。

そうになると、彼の行く先はきつと楽なものではず。できれば何か手助けをしてやりたいが私はこの街の医者だ。この街を離れることはできない。

「無力だな。」

私はただ彼のこれからの旅の無事をただ祈るのだった。

2話 異世界人であること（後書き）

また読んで下さりありがとうございます。よろしければまたよろしく願います。

3話 ギルド（前書き）

遅くなつてすみません。手元にパソコンがなかったなので投稿遅くなりました。

3話 ギルド

「へえ、ここが総合依頼取扱所ですか。なかなか立派なんですね。」

「そうだ。『ギルド』とか『トラブルバスター』とも言うぞ。一般的には『ギルド』の方が馴染みが深いな。それに立派なのは当然だな、この街はこの国でも大きい方だし。小さい町とか村になると簡易受付とその横に立っている立札に依頼が貼ってあるだけとか、拳句の果てにはギルドがないこともある。まあ、そういうところには大体依頼するような問題も大抵ないから必要がないのかもしれないな。」

今、ギルドの説明をしてくれたのが俺を助けてくれたシルバさんだ。あの後クレイさんの言った通り2時間後に来たシルバさんは目を覚ましていて俺を見て大層喜んでくれた。というか喜びすぎて若干うざかっぐらいだ。その後、他言無用と念を押した上で俺が異世界人だということを話した。そして今の状況を不安に思っていることを伝えるとギルドのことを紹介され、今に至る。

「いらっしやいませ。今日はどのようなご用件ですか。」

受付に行くときれいな制服らしきものを着た女性にマニュアル通りといった感じのセリフと営業スマイルで迎えられた。

「隣の奴のギルド登録をお願いしたい。」

そう言ってシルバさんがこちらを顎で指すと受付嬢がこちらに用紙を渡してきた。用紙には名前・出身地を書くだけで済んだ。その後いくつかの質問に答えるだけで登録は終わった。

「お待たせしました。こちらがタキ様のギルドカードになります。こちらにEと書いてありますが、これが現在のあなたのランクになります。ランクはEからSSSまであり、依頼達成数や難易度のより高いものを完遂することでランクがあがっていきます。各依頼には一つ一つ見合ったランクが書かれています。どの依頼もランクに関係なく受注することは可能ですが、できるだけ自分と同じランクのものもしくは1つ上のランクものを受注することをおすすめします。また、一度依頼を失敗した場合は報奨金の半分の違約金が発生しますのできをつけるようお願いします。もし、違約金を払わなかった場合はペナルティとして一定期間のギルドの利用の禁止もしくは最悪の場合ギルドカードの剥奪となりギルドを一生利用できなくなりますのでくれぐれもそんなことにならないように気をつけてください。」

なるほどな。言外に無理をすると言っている訳か。

「まあしかし、そんなことには滅多にならんがな。そう言う奴は自分の力も把握できないド3流どもだけだ。お前も一度しっかりと自分の能力を把握することが必要だな。」

受付嬢の補足をするようにシルバが話に入ってくる。話を聞いてギルドもけつこう考えていることが分かった。これならむやみに無理な依頼を受けたりすることもないだろうし、依頼失敗の数も減るだろうからギルドの信用にもつながる。

「では、特に質問もないようなので説明は以上とさせていただきます。今日はこれから依頼は受けて行かれますか？」

「ああ、お願いします。」

「では、タキ様。あちらに見えるのが依頼が一覧で貼ってあるボードになります。受ける依頼が決まりましたらこちらにまたお越しください。」

ボードの方には既に数名が依頼を探しているようで、あれこれと悩んでいた。ボードには数百にも及ぶ依頼があり、その内容も飲食店の手伝いや街の清掃といった雑用から、街道に出現する魔物の討伐や商業キャラバンの護衛に至るまで多種多様にある。

「やっぱ最初だしEランクの依頼にしようかな。」

そう思い、受付に再び戻ろうと振り返るとシルバさんが既に依頼を受注していた。

「シューイチ！依頼の方はもう選んだぞ。お前も早くこっちに来い。」

シルバさんの強引さに少し溜息をつき、再び受付に足を運ぶ。

「あのシルバさん、これAランクの依頼ですよね？」

シルバさん近くによって依頼書を覗き見ると、そこにはでかでかとAランクと書かれていた。

「俺Eランクなんですけど・・・」

「大丈夫だ。俺がついてるからな。」

独り言のように俺が呟くと気にするなというように笑いな

がら俺の肩を叩く。

「どうやら受付嬢も初心者依頼にいきなりAランクの物をもってきたことに驚いたようで、俺がこの依頼を受けることに難色を示していたようだ。」

「アデイ、心配するのは分かるが大丈夫だ。俺のランクはAAAだぞ。今更Aランクの依頼なんてどうってことはない。」

「でもタキ様はまだ初心者ですよ。」

この受付嬢の名前はどうかアデイというらしい。最初はただ失敗したときのギルドの信用が落ちることを恐れていたが、どうやら俺のことを本気で心配しているくらいだ。

なんていい人。

「それについてもおそらく大丈夫だ。なんてたって無手でソードタイガー3匹をのしてしまうような奴だからな。」

一瞬驚愕の表情を見せたアデイではあったが、すぐに「そんなバカな」といった感じで笑いだす。

「全くシルバさんも冗談きついですよ。ソードタイガーといえば一匹でも最低でもBランクの実力がなければ倒せないような相手ですよ。それを三匹もしか無手で倒したなんてありません。普通ならAもしくはAAランクに相当する依頼ですよ。」

「そうはいつでもなあ、本当のことだし。」

顎に手を当てながらどう説得しようか悩むシルバさんだったが、何かに気づいたようにパツと顔を明るく輝かせると背に背負ってい

たバッグを突然漁りだした。そして、目的のものを見つけるとまたアディに直りバッグから取り出したものを見せる。

「ほれ、見てみる。ソードタイガーの牙だ。これで分かったら、こいつはAランクの依頼にも十分に対応できる。」

「確かに本物のようですね。ですが、それだけではタキ様がソードタイガーを倒した証拠にはなりませんよ。」

牙をシルバさんに返しながらかも折れないアディさん、

「そうだな、それじゃあ牙を調べてみる。牙の内の一本がシューイチの腕に刺さっていたから血痕が残っているはずだ。それでシューイチがサーベルタイガーに何らかの形で関与した証拠にはなるだろう。まあ、はつきりと戦った証拠があるまで納得できないと言うのならもうそれまでだな。後は俺の言葉を信じてもらうしかない。」

「・・・・・・・・・・。」

シルバさんが一気に言い終わると、アディはまた何か考えるように沈黙した。

「すみません。シルバさんもありますしきっと大丈夫ですから納得してもらえませんか。」

話の邪魔になると思い今までずっと黙ってきたが、シルバさんにいつまでもおんぶにだつこというわけにはいかないので口を挟ませてもらった。というか問答の内容自体お互いに俺の想を想つてのことだし。

「・・・分かりました。そこまで言うのなら引き止めたりはしません。それにどうせ依頼を受ける受けないの自由は冒険者の方々にあるわけですから私には依頼の受理を拒否することはできないです。それに私は止めましたからね。どうなってもしらないですから。」

言い終わると同時、印鑑のようなものを荒々しく紙に押しつける。押し終わった後を見れば『受理』と書かれた印があった。アディの顔を見ると先ほどの荒々しい感情はどこにもなく、落ち着いた仕事の顔に戻っていた。

「それでは今回の依頼の内容の確認を改めてさせていただきます。依頼の内容はAランク『ギグスの討伐』で間違いないですね。」

「ああ。」

「はい。」

「場所は北の森にある泉のほとりとなっています。完遂条件は現在確認されている7匹のギグスを討伐し、その証明部位である尻尾を数の分だけ持つてくることです。もしそれ以上の数いた場合はそのままその分の討伐をお願いします。その場合はプラスで報酬が支払われます。一応説明はこれで終了ですが他に何か質問はございますか。」

「ギグスの換金部位ってあったけか？」

「ありますよ。換金部位はソードタイガーと同じように牙になります。ところで先ほどのソードタイガーの牙ですが換金なさいますか？」

「ああ頼む。」

「分かりました。」

アディは牙をシルバさんから受け取ると一度裏の方に入って行った。

「シルバさん、証明部位とか換金部位って？」

「そうか、お前は知らないんだっただな。証明部位っていうのは魔物を討伐した証となるものだ。これがないと依頼を終わらせたことにはならないから気をつけること。魔物討伐系の依頼の際には必ず証明部位を確認しておいた方がいい。それで換金部位はそのままの意味でカネと交換できる魔物の身体の一部のことだ。冒険者や傭兵つっ―のは依頼をこなすだけでも生活することはできるが、やっぱりカネがあるに越したことはねえだろ。だから魔物の一部をこうしてギルドに持ってきてカネと交換してもらうのさ。一応換金部位の方も事前に確認しとけ。中には換金部位のない魔物もいたり、逆に全てが換金部位となるような奴もいるからな。もし、カネがあるんだったら図鑑を買って携帯しておくつても手だな。少々荷物になるが。」

「へえー、さすがAAAだけありますね。やっぱりいろいろと詳しいですね。」

「関係ねえよ。こんなのは初歩中の初歩だ。知らない奴の方が珍しい。」

スキンヘッドで筋骨隆々なシルバさんが見た目とは裏腹に必死に照れるのを隠そうとしている姿を見て俺は不覚にも愛らしさを覚え

てしまった。

「お待たせしました。ソードタイガーの牙5本で75万ベルになります。こちらの中に硬貨が入っていますのでご確認ください。」

75万ベル。

クレイさん曰くこちらでは確か一般人の月の生活費が5万ベルだったはずだから。約1年分の生活費が稼げたってことか。ちなみに1ベルで石貨1枚、100ベルで銅貨1枚、1万ベルで銀貨1枚、100万ベルで金貨1枚となっている。

「ソードタイガーの牙って随分高い額で取引されるんですね。そんなに希少なんですか？」

ギルドからの帰り道、気になったので聞いてみた。

「まあ、そうだな。だがソードタイガーの個体数自体はそんなに少なくはないから珍しいわけじゃない。お前も戦ったからわかるだろうがあいつらは相当強いし、集団行動を好む。となれば、倒すのは相当難しいし、ソードタイガー自体が人の居住範囲に近づいてくることは滅多にないから討伐依頼もない。必然的に牙という材料が高くなるわけだ。だから逆に牙を狙ってソードタイガーを狩りにいくような奴がいるんだが大体が返り打ちだな。」

なるほどな。これなら効率よく生活費を稼ぐことができそうだな。モノによっちゃ一攫千金ってか。まあ、そんな物が存在するかは知らんが。

「お、ここだ。」

目の前にはなんともひどく埃をかぶった建物がぼつんと建っていた。

まああれだ。どう見ても廃屋だな。

「あの・・・この建物は？」

「入ってみれば分かる。ほら、行くぞ。」

そう言っただけを促すが正直ムリ。なんかもう埃ハンパないもん。絶対一発で体質を埃アレルギーにしていまいそうな量だし。

「ほら、グズグズするな。早く入るぞ。」

ドアに手をかけ扉を開く。

「ドサッ」

今ドサッていった！？絶対埃の出す音じゃないよね。一体どれほど質量の埃が・・・。

そして無情にもその餌食となったシルバさんかというと

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

呆然と立ち尽くしていた。

そう、真っ白にな。

「あの・・・入ります？」

恐る恐る声をかけると我に返ったのか顔をいきなり赤く染め始めた。おそらくだが憤りと羞恥の両方だろう。

「おい、ばばあ。ちゃんと外も掃除しろって前も言っただろうが。」

「というか気付けよシルバさん、なんて心でツツコミを入れていると奥からお婆さんが姿を現した。」

「全く、もうちょっと静かにできないのかねえ、あんたは。それで今日は一体何のようなんだい。」

「アンタのせいだろう。まあいい、それで今日来たのはコイツの武器を調達にな。」

え、初耳なんだけど・・・

「そうかい。じゃあ、その暖簾くぐると武器がたくさん並べてあるから好きなのを選びな。シルバの知り合いなら安くしておくよ。」

「えーと、でも俺カネないんですけど・・・。」

「心配ねえよ。カネならある。」

「ほらよ。」と言いながらさっきギルドでもらったお金の入った袋を投げてよこす。

「でもこれって・・・。」

「かまわねえよ。お前が倒したソードタイガーの牙のお金だ。だからそのお金はお前に返す。」

・・・

もしここで俺が何と言っても頑としてこのお金を俺に渡すことを譲らないだろう。ここは素直に受け取っておくべきだろう。

「ありがとうございます。」

深く頭を下げた。

シルバさんには助けてもらってばかりだ。実は俺の治療費を出してくれたのもシルバさんだった（といってもクレイさんが相当割り引いてくれたらしい）。

「いいから、さっさと選んで来い。」

「はいっ！」

元気よく頷いてのれんをくぐって武器のある場所に入った。

「シルバ、あの子は異世界人かい。」

秘密を突然当てられ、動きの止まるシルバ。

「やっぱりかい。」

まだ何も返答を返していないシルバだったが、老婆の方はどうやらシューイチが異世界人であることは確定的らしい。

「さすがだな。どうして分かった。」

「まあなんとなくね。とりあえず、服を早く替えることだね。勘のいい奴はおそらくそれだけで気付く可能性もある。こちらに服で周りに馴染ませてしまえば少しは隠すこともできるかもしれないよ。」

「そうだな。」と小さく頷くシルバ。

「それにしれもこのタイミングにねえ。まあこの世界にとっては最高のタイミングなんだろうけどね。」

「そうだな。俺としても直接シューイチに関わらなきゃそのことを喜べたんだが、関わってしまった今は正直手放しには喜べない。むしろ、この世界に来てほしくなかった。」

そう話す2人の顔はそうじて暗い。

「まあ、今ここで何を言っても仕方のないことさ。それならアタシは少しでも良い武器を選んでこようかねえ。」

そう言つとシューイチの方へと歩みよっていった。

「俺もあいつが一人でも生きていけるようにしなきゃならんな。」

そう1人呟くのであった。

3話 ギルド（後書き）

最後までお読みいただきありがとうございました。よろしければまた次話の方もお読みください。

4話 初仕事（前書き）

前と開いてしまいました。それではどうぞ！！

4話 初仕事

今俺は依頼であるギグスの討伐で森の中に来ている。というか既に戦闘中だ。

それで問題のギグスなんだがいろんな意味で強烈な奴だ。シルバさんから事前に情報を得ていたが、聞くのと実際に見るのでは全然イメージが違った。

「出来れば戦いたくないなあ・・・。」

そう呟くのも無理はなかった。

ギグスというのは簡単に言えば巨大なイノシシだ。体長は3メートルといったところで前方には1メートルもの巨大な牙が敵を威嚇するかのように伸びている。人間など一突きされれば一発で串刺しになるだろう。だがまあそれはいい、問題は・・・。

「臭い・・・息が・・・出来ん。」

そうギグスは体臭がハンパなかったのだ。しかし、シルバさんとは視線を向けてみれば突進してくるギグス3頭をうまくいなしてかわしながら戦っている。どうやら臭さの影響はなさそうだ。要は馴れの問題ということだろうけど、これは我慢出来ん。

「お前らに1つ言いたいことがある。」

戦っていないギグス6頭に向かって声をあげる、シルバさんも頭に疑問符を浮かべながらこちらをシルバさんと戦っていたギグスもこちらを見る（ちなみにギグスは情報よりも2頭多い9頭いた）。

いるからだ。元々運動神経は良い方でどんなスポーツでも運動部の奴と渡り合えるくらいにはこなせたし、ケンカも家が剣術道場をやっている幼馴染と良くケンカしていたせいでそこらへんの奴らが数人でかかってきても問題ないくらいには強かった。だが、今の身体能力は異常ともいえるものだった。今までの身体能力なら俺以外でも学校で数人はいただろうが今は人間の限界を明らかに逸脱している。まあ、今の状況そして、ここにきてすぐの出来事とこれからのことを考えるとそのことは幸運以外の何物でもないが。

「簡単にやられるわけにはいかないねえ。」

言うと同時背後の木に向かい跳躍する。そのまま再び木を蹴りあげ反動を利用し、ギグスの背後を取る。木を蹴り倒しそうで心配だったがうまく力加減で来たようだ。

先ほどまで自分が立っていたところを見ればそこらへん一帯の木々をギグスがなぎ倒していた。

「シルバさん、いつまで呆けてるんです。一気に片づけちゃいますよ。」

俺の声に我に振り返り慌てて戦闘態勢をとるシルバさん。

「さて、それじゃあ真打ち登場ってね。」

俺が手にするのは1メートルをやや超えるぐらいの長さの長大な刀、いわゆる大太刀とも野太刀とも言われるものだ。勿論これを手に入れたのはシルバさんに連れられて行った老婆の店である。

「何か良いものはあったかい。」

老婆に声をかけられるが正直武器なんてほとんど持ったことないし、ここにあるものも俺が見たこともないような武器ばかりだ。そんなとき奥の方にちよつと気になる武器を見つけた。

「ばあさん、この剣は？」

「ああ、その剣かい。あんた良い眼してるね。」

いや褒めてくれるのは嬉しいんだけど、あんなところに1つだけポツーンとあつたらそりや気づくでしょうよ。

「でもそれは非売品でね。売らないつもりだったんだけど・・・どうだい。あんたはシルバの知り合いだし売ってもいいよ。」

それはラッキーだな。非売品でことは何か訳ありの商品ってことだ。ということはきつと強力な武器に違いない。

「じゃあ、ちよつくら失礼します。」

そういつて柄を手にする。確かに何かこう身体のそこから僅かながら力があふれてくるような気がする。

「ばあさん、これ妖刀なの？なんか力が湧き上がってくるような感じがするんだけど・・・。」

「そうかいそうかい。それは良かった。お前さんには感じ取れるんだね。これは精霊の加護が付いている特殊な剣だね。500年くらい前の勇者が使っていたものなんだよ。でもその力を感じ取れないボンクラが多くてね、いつの間にか非売品にしまってたんだ。」

嬉しそうに言う老婆は先ほどシルバさんと話していた時とは違い、しわだれけの顔を笑顔でされにしわくちやにしてとても優しいおばあちゃんのようなようだ。

「どうだい？買ってみたいなかい。安くするよ。」

老婆が期待の目でこちらを見ているが・

「これも良いんですけど、まだ他のも見てもいいですか？」

そういうと少し落胆の表情を見せる老婆であったが、すぐ表情を戻すと俺がどんな武器を欲してるのかを聞いてきた。

「こういう両刃の剣じゃなくて、片刃の反りがある剣ってあったりします？」

ジェスチャーも交えて老婆に元の世界でなじみ深いまでとはいかないが、少しは扱ったこともある刀の特徴を伝える。すると老婆は少し思案したかと思うと店の裏の方に消えていった。

その間ヒマだったので改めて先ほどの西洋剣を握ってみる。

確かに俺でも分かるほど良い剣だと思う。しかしながらなぜだか手に馴染まなかった。なんだろう、この剣は違うと思った。もしかしたらこの剣が俺を選ばなかったのかもしれないな。勇者の剣らしいし、勇者が持つべきものなんだろう。

「あつたよ。お前さんが言つてたのはこの剣のことだろう。」

そう言つて差し出したのは1メートルを超える刀だった。俺の知っているモノよりも長かつたがそんなのは関係ない。全く知らない土地で自分の見知つたモノを見つけたことがこんなにも嬉しいとは思わなかつた。すぐに手に取つてみたくなつた。

「すみません、失礼します。」

手に取つた瞬間、「これだ!」と思つた。なぜだろう。初めて握る刀なのに懐かしい感じがする。

おそらくこの刀は野太刀とも大太刀とも呼ばれるものだと思う。きれいな波紋だ。素人目ではあるが秀逸なモノであること分かる。この世界には刀と呼ばれるものがないはずなのに誰が一体この刀をうつたのだろうか。

「ばあさん、この刀を作つた人つて知つてる?」

「ああ、本当かどうかは知らないが異世界人が作つた刀らしいよ。片刃とか私たちには馴染みのない形状だからね、買い手がなくてもう物置の方に放置してたんだよ。」

そうだろうな、刀について何も知らない世界でわざわざ片刃というデメリットを背負うことになる武器を選ぶ奴はいないか。

「ばあさん、俺これにするよ。代金はいくら?」

「それでいいのかい、うーん・・・といつてももう物置に放置しておいたようなモノだからね。タダでやるよ。」

いや、さすがにそれは引ける。こんな良い刀なんだ。お金は払いたい。というか作ってくれた人に申し訳が立たない。

「さすがにタダってのは・・・作ってくれた職人にも失礼なんदैいくら払わしてください。」

「じゃあ貰おうかね。銀貨1枚でいいよ。」

銀貨5枚って・・・そこらにあるボロ武器と同じなんだけど。

「アンタはその武器の価値が分かるのかもしれないけど、私たちに正直その武器に価値は見出せないんだよ。だからボロ武器と同じような値段でいい。引き取ってくれるだけでありがたいね。」

老婆は俺が口を開こうとする前に何かを察したのかそう言ってきた。値段には不満だったが老婆の言うことにも一理ある。ここは素直に甘えさせてもらおう。

「感謝します。」

シルバさんにもしたように頭を下げ、代金を払う。

それをみはからったかのようにシルバさんが顔を出した。

「お、決まったのか。」

「はい。」

そう言って手に持っている野太刀を見せる。

「へー、珍しい形してんな。異世界の武器かなんかか。」

「そうです。俺の元いた国に古くから伝わる武器です。」

「そうか、良いものが見つかってよかった。それじゃあ次は服でも買いにいくか。その格好は少しばかり目立つしな。・・・それじゃあ、ばあさんありがとな。」

そういつて先に店から出ていく。

「それじゃあ、俺も。本当にありがとうございました。」

ドアに手をかけ出ようとしたところで老婆に呼びとめられた。

「ちよつと待つとくれ。頼みがあるんだがこの剣も持って行つてくれんかねえ。」

俺の目の前に差し出されたのは先ほど手に取った西洋剣だった。

「え、でも・・・」

「いいからいいから。」

そういつて無理やり剣を押しつける。

「ここに置いてても意味がないからね。だからその剣を扱えそうなアンタに持っていつてもらった方がこの剣としてもいいだろうから、もし要らないんだつたら旅でも出会ったその剣を扱えそうな人物にでも渡しとくれ。そんじゃあ、死ぬんじゃないよ。」

老婆はそう言つと俺を店の外に追い出し、ドアを閉めてしまった。

「おい、シューイチ行くぞ。ボケっするな。」

追い出されたまま突っ立っている俺をシルバさんが催促する。俺は改めて店の前に立つと深々と礼をしてシルバさんを追いかけた。

というわけで今握っているのは老婆の店で手に入れた俺の世界の国の武器である野太刀。

名前は何にしようかな・・・お、そうだ野太刀って確か斬馬刀とも呼ばれてたよな。よし、それでいこう。

それじゃあ、ギグスには悪いが試し切りの実験体になってもらおうか。

目の前を見るとギグスが身体を反転させてまた俺に突進してくる姿勢を見せていた。

「よっしゃあ、かかってこいや。」

俺の声を合図に再びギグスが猛烈な勢いで襲い掛かってくる。俺はそれに対して正眼の構えを取る。そして精神を集中しているところ

「シューイチ！そこから少し下がれ。」

シルバさんを見ると何やらぶつぶつと呟いている。

「……この世の万物に宿る精霊たちよ、我が言霊に従いその力を現せ、爆炎！」
イクスプロジア

瞬間、何か危険を察知し素早く後ろへと跳躍する。

と、目の前を巨大な炎の塊が通り過ぎていく。そしてそのままその塊はギグスたちの目の前に着弾した。

ドオオオオオオオオオオオオオオ

同時そのままその塊は爆発を起こし、俺の視界を真っ白に染め上げる。聞き慣れないあまりの轟音と光に思考が追いつかない。

「へっ？」

思わず間抜けな声が出てしまった。

少しするとあれだけ視界と耳を覆っていた光と轟音も消えてそこには煙だけが残っていた。やがて煙も晴れると既にそこには丸焦げになったギグスの姿があった。

「いやーよかった、よかった上級魔法は扱いが難しいからな。ギグスも跡形もなくけし飛ぶんじやないかと思ったんだがなんとか成功したみたいだな。」

呆然とする俺を尻目にガハハと笑い声を上げるシルバさん。そのままギグスに歩みより証明部位と換金部位をはぎ取っていく。

なんとか落ち着いてきた俺はなんだか怒りがこみ上げてくる。

「シルバさん、あんなことが出来るんならなんで最初から使わなかったんですか。」

少しトゲのある口調で聞く。

「いやなあ、最初はギグスがバラけてたし、最初に使っちゃまうと残りの奴が逃げちまうかもしれないと思って使わなかったんだよ。さつきはちょうど全部集まってたから今しかないと思ってな。」

そしてまたガハハと豪快に笑うシルバさんに怒る気も失せた。

あーあ・・・せっかくの見せ場が・・・。あんなにやる気もだして初披露ともなる斬馬刀も結局使わずじまいとか・・・。

大体シルバさんに魔法とか似合わないんだよ！！くそつ、帰ったら絶対魔法教えてもらってやる。

「ほらっ、何してる。お前も早くはぎ取るの手伝え。」

俺の気持ちを知りもせず、そう急かすシルバさんに溜息をつきながら魔法で焼け焦げた場所に足を運ぶのだった。

4話 初仕事（後書き）

ありがとうございました。また次もよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7740o/>

異世界Life

2010年11月22日21時48分発行